

やはり俺がIS学園にいるのは間違っている。

Parfait

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも比企谷八幡が一夏と同時期に生まれてISを使っていたらというIFストーリー。八幡以外は全員ISのキャラです。

目次

IS学園	1
初めての授業	5

IS学園

俺は今、目の前の女教師が淡々とある作文を朗読しているのを聞いていた。

その内容は知っているのに知らない文章、小説家が自らが生み出した文章が、手元を離れて新たな世界を構築していくように。といったかっこいい話ではなく、ただ自分が深夜テンションで書き上げた訳の分からない文章だった。

「あ、あの……何か問題でも……」

女教師はふうとため息を吐くと、当然の結論としてこちらを睨みつけてくる。

いやいや入学式終わったらいきなり呼び出された俺の方が溜息を吐き……怖っ、こっちに向けてくる目力が既に人を殺せそうなレベルなんだけど。何、この人心読めちゃうの？エスパーなの？

「なあ比企谷、私が入学にあたって出した宿題は何だったか言ってみろ」

「……はあ、『ISの歩んできた道』というテーマのレポートでしたが」

「じゃあ何で結論がリア充爆発しろになるんだ」

「いや女尊男卑の世の中、男子は大体同じ様なことを思っ顔のコンマ数センチというところを空が切る。言い終わる間も無く顔の横に振り下ろされる出席簿。」

なんかもう幻の刃がみえるまでである。人間の出せる速度じゃねえよ、あれ。

「このレポートは明日迄に書き直してこい」

「いやそれは」

「これは決定事項だ、分かったらさっさと教室に向かえ」

「ひ、ひゃい」

あまりの怖さに思いつきり舌を噛んだ。比喩とかじゃなくマジで。迷わず回れ右して職員室を退出すると、どつと冷や汗が出てきた。

や、やべえ。なんか後ろに鬼神が見えたんだけど、あれ本当に俺と

同じ人間なの？絶対人に化けた魔神とかだよね？

恐怖に震えながら、急いで職員室を後にする。

いくつかの階段を経ながら似たような景色の廊下を歩いていると、女子特有の黄色い声が聞こえてきた。声のする方に視線を向けると、恐らく自分の教室であろう1年1組のプレートが目に入る。もう帰りた。

気づかれないようにそっと後ろのドアを開け、空いた席に着席する。ミツシヨコンコンプリート、俺のステルス性能に隙はなかった。

あ、ただのぼっちですね分かります。

日頃培ったぼっちスキルとして完全に空気と同化していることを内心誇りに思っていると、教室前方の扉が開けられる。

「み、皆さん、こんにちは、副担任の山田真耶です」

小動物のような動きで壇上まで上がり、たどたどしく自己紹介をすると、彼女は緊張で少し引き攣った笑顔を見せた。

小柄な体躯に肩口ほどのショートカット。童顔の上に乗った不相応に大きい眼鏡と、副担任という挨拶がなければ同級生と勘違いしてしまいそうだ。一部分を覗いて。

というかおっぱ、ゴホン、母性の象徴が唯一全体に不釣り合いなほど強烈に個性を主張しまくってる。自然と視線はそこに吸い寄せられる。質量が大きくなるほど引力が大きくなるって本当なんだな、やっぱニュートンって凄いわ。

いや落ち着け八幡、あんなもの所詮脂肪の塊。俺の理性を総動員すればなんでもない。おっぱいごときが俺に勝とうなどおっぱいがいっぱい。あれ？理性負けてね？

しかしぶっちゃけこの教室ではどこ向こうがさして変わりはない。なぜなら俺ともう一人の男子以外全員女子だからだ。何なら学園全体そうなんだが。

……どこのエロゲだよ、これ。今時もうこの設定売れないぞ。

だが唯一の救いがクラスの視線はもう一人の男子、織何とかに向かっていたことだ。てか名前なんだっけ、まあいいや。

その織何とか、織口？の方を向くと例のおっぱい、もとい山田先生

に促され、自己紹介を始めていた。

「えー……えつと、織班一夏です。よろしくお願いします」

そう言つて頭を下げる。それにしてもイケメンだな、こいつ。周りの女子たちがキラキラした目で次の言葉を待っている。

「以上です」

ガタツ、とクラスのみんながずっこけた。どんだけ期待してたの？ いやいやあんなもんでしょ、自己紹介つて。そもそも自己紹介なんて誰も聞いてないよ、ソースは俺。

頑張つて友達作ろうと詳しく説明したのに、誰も俺の名前覚えてなかったし。

さも自分を知ってると思つて話し掛けたときの誰こいつみたいなのが忘れられない。いや、クラスメイトだよ？ 何なら隣の席だよ？

独りで勝手に悲しくなっていると、スパンツ！と小気味悪い音がなる。音の鳴った方に目を向けると、さっきの魔神が織班の頭に出席簿を振り下ろしていた。

「げえつ、関羽ー！」

「誰が三国志の英雄だ」

また頭を叩かれる。多分脳細胞が億単位で死んでるよ、あれ。というかそもそも織班のボケがよくわからないのだが、何故に三国志。

「諸君、私がこのクラスの担任の織班千冬だ。お前ら新人を一年で最低限使い物になるように育てるのが仕事だ。私の言うことはよく聞き、そして理解しろ。逆らってもいいが、私の言うことは聞け。いな」

ぼ、暴君だつ、暴君がいる！てかこの人が俺の担任なの？

「キヤ————本物の千冬様よ！」

「私お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！ 北九州から！」

「私お姉さまのためなら死ねます！」

一気に色めき立つクラスメイトたち。えつ、この子達DMなの？ お姉さまの為なら死ねちゃうの？ 俺このクラスで一年過ごさなきゃいけないのか……。いやまあいいんだけどね、既にまたぼつちな未来見えてるからね、クラスメイトとかあんまり関係ないね。

「……毎年よくもこうバカばかり集められるもなだな。それとも何か、私のクラスにだけ集中させてるのか」

そう言うのと織班教諭は溜息を吐き、

「もうHRの時間もあとわずかだな。おい比企谷、最後にお前が自己紹介しろ」

いきなり俺を指名してきた。クラス全員が俺の方へ視線を向けてくる。

「えっ、いつからいたの？」とか 「なんか凄い目が死んでない？」とか聞こえてくるんだが気のせいだよな？ というか隣の子とか驚き過ぎて椅子から転げ落ちてた、どんだけ気づかれて無いんだよ、俺。

やばい、ぼっちにはこの視線の嵐は辛い。なんかもう吐きそう。いやでも人間は第一印象である程度の人間関係が決まるという。頑張るんだ八幡、栄光の高校生活を掴み取れ！

「ひ、比企谷八幡でひゅ、よ、よろしくお願いしましゅ」

静まりかえる教室。灰色の学園生活しか見えなかった。

初めての授業

徐々に女子特有の姦しい声が教室内に飽和していく。

一時間目のIS基礎理論がやつとの終わりを告げ、今は休み時間を各々が自由に過ごしている。

まだ高校生活初日にも関わらず既にグループは出来上がりつつあり、所々から楽しそうな笑い声が聞こえてくる。

その中でも人溜まりが出来ているのは当然のことながら、この学園の数少ない男子、織斑のところだった。というか人の壁で姿が見えない。そこにシャンシャンでもいるの？整理券配ろうか？

ちなみに1人上野動物園をしている俺は、耳にイヤホンを差し込んで顔を伏せているので当然の如く孤高。

え、そんなことしなくても女子は来ない？ 知ってた。

「……ちまん、おーい、八幡ー」

このクラスには俺以外にも八幡なんて名前いるんだな、と思っっていたらいきなり肩を揺すられる。

仕方なく顔を上げると何故か目の前にイケメンがいた。

「八幡、数少ない男子同士仲良くしようぜ」

眩しい、こいつ顔面ニフラムかよ。大丈夫かな、足先とか消えかかっている気がする。

「ああ、よろしく」

「それにしても同じ男が居てくれて助かったよ、女子ばかりだから肩身が狭くってさ」

今度は男臭い笑みを浮かべながら肩を組んできた。あれ？こいつ良いやつじゃね？

チヨロイン並みにイケメンに心を許していると、どこからか視線を感じた。

視線の方向を辿ると、凜とした雰囲気のパニーテール美女がこちらを睨みつけている。俺はそつと目を逸らした。

やっぱこいつと居ると碌な目に合わないかもしれない。

思わずただでさえ腐ってる目をさらに腐らせて遠い目をしていると、握手を求めて手を差し出された。

「これから宜しくな」

「……ああ、よろしく」

手を握り返した所で丁度休み時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。

よ、よかった……なんかポニテ美女がこれ以上喋るなどでも言いたげに目力でぶん殴ってきてたし。

まあ俺一言しか喋ってなかったけど。

「じゃあまた後でな」

また来んのかよ。

◆？

三時間目のチャイムがなると何故か魔神こと織斑先生が教壇に立った。

え、二時間目はどうしたのかって？ 織斑が電話帳並みの厚さの参考書を捨ててたぐらいいしかイベントがなかったから飛ばした。あいっ実はアホなのでは？

そんな感じで織斑、というか先生と苗字が同じでややこしいから一夏と呼ぶ、がクラスで目立っているなか、俺は至って平和だった。平和すぎてノーベル平和賞を貰えるレベル。

というかそもそも既にこのクラスでの俺の立ち位置が決まった気がしてならない。

みんな俺に対して興味なさ過ぎない？ IS使える男子って珍しいんじゃないの？ 愛の反対は無関心って本当だったんですねマザーテレサ。

いや、一人だけ例外がいたわ。なんか一夏だけはやたらと興味津々だったわ。何なの？ あいつホモなの？ でも一夏が話しかけてくる度にハッピーセットのようにポニテ美女がこちらを睨みつけてくるんだよね。ハッピーって何だろう。

「納得いきませんわ！」

そんなどうでもいい思考を遮るように、いきなり大声が耳に飛び込んできた。反射で向いた先ではロココ時代の姫みたいな髪型の金髪っ娘がパンツと机を叩きいきり立っている。このクラスの女子怖すぎん？

「そのような選出は認められません！ 大体男がなるなんていい恥晒しですわ！ このわたくしにそのような屈辱を一年間も味わえと！」

全然話についていけない。気付かぬ間に話が進んでいる。この娘が何で怒ってるか本当にわからない。

「本当にクラス代表をやるべきなのはわたくしですわ！ そもそもこんな極東の、しかも文化も後進的な島国で暮らさなければならぬこと自体、耐え難い苦痛で——」

「イギリスだって大したお国自慢ないだろ。世界一不味い料理で何年覇者だよ」

「な、な、なんですって！ わたくしの祖国をバカにしますの!?!」
取り敢えず一つだけ分かった、こいつら愛国心強すぎだろ。なんで一夏は他の暴言は黙って聴いてたのに、日本がバカにされた瞬間にキレてんだよ。どう考えても千葉が一番上だろ、このIS学園も千葉に建ってるし。

待てよ、日本がバカにされてるってことは千葉も入ってるのか、俺もキレていい？

「静かにしろ」

このお国貶し大会に参加しようと思いを浮かした瞬間、織斑先生の言葉が鳴り響く。全員が蛇に睨まれた蛙のように静まり返った。自殺は良くない、千葉愛を語るのは今度にしておこう。

先生はクラスが静寂に包まれたのを確認したあと、一夏と金髪を鋭い視線で射抜いた。

「クラス代表は模擬戦で決めることにする。勝負は一週間後の月曜、場所は第三アリーナだ。オルコットと織斑は其れ迄に準備しておけ」

そう言うとは扉に向かってスタスタと去っていく。素晴らしい問題
解決能力だな、俺関係ないからどうでもいいし。

尊敬の念を込めて織斑先生を見ると、何故か目が合った。

「比企谷、お前もだ」

最悪だった。